

漢字学習の一考察

— 漢字圏以外の外国人向け、漢字学習法 —

日本人のみならず世界の民族に対し漢字・仮名・漢字仮名交りについて正確に読み易く
能率的しかも調和よく書写する指導技能の研究の中、第一着手としての漢字初歩学習と
して必要性にせまられ、研究に踏み切ったものである。

文教大学言語文化研究所研究員 TRUDY MADUZ

(トウルーティ・マドウツツ)

研究の動機

文字の学習をするために、小学校学習指導要領第一
学年、第二学年配当漢字（教育漢字一〇〇六字）の中
から先ず、最も基礎的基本的な二十八文字を選んで、
漢字学習の一助として、日本人以外の外国籍の方に試
みた。なぜ、この二十八字を選んだかといえば、これ
らの文字の中には、漢字楷書の基本的な「点画」が含
まれているからである。

「点画」には、点や横画・縦画・斜め画などがある。
また、それらの点画の長短・方向・間隔・接し方（浅
い、深い）などの組み合わせにより字形が形成される。

点画には、始筆・送筆「そり・曲がり・折れ」、終筆
「止め・はね・払い（左払いの方向の四系統・右払い
の方向・縦払い・その他の払い）」、筆記具を運ぶ際に
生じる筆圧（上下運動の強弱）、速度（遅速）などの筆
の運び方がある。これを運筆という。

人類はその昔、意志の伝達は手ぶり、身ぶりか、か
たことの発声だったと思われる。やがて話し言葉が発
生し、そのあと、記録を残すため、あるいは遠隔地へ
の伝達手段としてどうしても文字の必要性が生じた。

文字の目的は、内容を伝達することができれば、こ
と足りるわけである。その目的が達成すれば先ず、そ

の第一段階は終わったと言えよう。しかし、読む立場からは、読み易く、整っていて、誤字がなく、さらに気持ちの上で美しさを感じずることを誰でも欲するのではないだろうか。そのために、整った文字を書くことを心掛けねばならない。それには、先ず、基礎的・基本的な事項を重視し、できるだけそのルーツを探りながら、大綱をはずさず文字の発生をたどりつつ、日本文化の表現に意を用いなければならない。

漢字は表意文字といわれ、漢字の成り立ちの巧妙さに気付きながら、漢字字習を進めることの必要性を思つて、この研究を進めてみた。また仮名文字は、表音文字であり、日本語は表意文字の漢字と、表音文字の仮名とを交えて使用することによって、日本語を表現している。そして、日本文化とともに日本人の心に一体となつて、「道」の芸術と言われるまでに築き上げていることには、ただただ驚嘆して、遂に外国籍でありながら、とりつかれてしまった。

書体について

漢字の発生は五千年前とも三千年前とも言われ、さだかではない。しかし中国の新発掘により、次第に漢

字のルーツが明確化しつつあるようである。

漢字は象形文字の代表として、世界文字文化の王座を占めていることは言うまでもない。すでに史的に確証されているもので、書体の変遷のあらましを調べてみると、『書源』の巻頭解説のところに「書体変遷表」が掲載されている。最もわかりやすく表解されているので、それを引用することとする。

『書源』藤原鶴来編 二玄社刊 P・一四」

書體變遷表 (編者書)

六義 造字法に象形・指示・會意・形聲があり 使用法に轉

注 (樂惡)・假借(革來)がある、之を六義という。

章 (漢)

草 (漢六朝)

龜甲文

文殷周

鐘鼎文

篆書 (秦)

隸書 (秦漢)

(年) (步) (至) (女) (鹿)



楷書 (漢六朝)



行書 (漢六朝)



(平安朝) 片假名



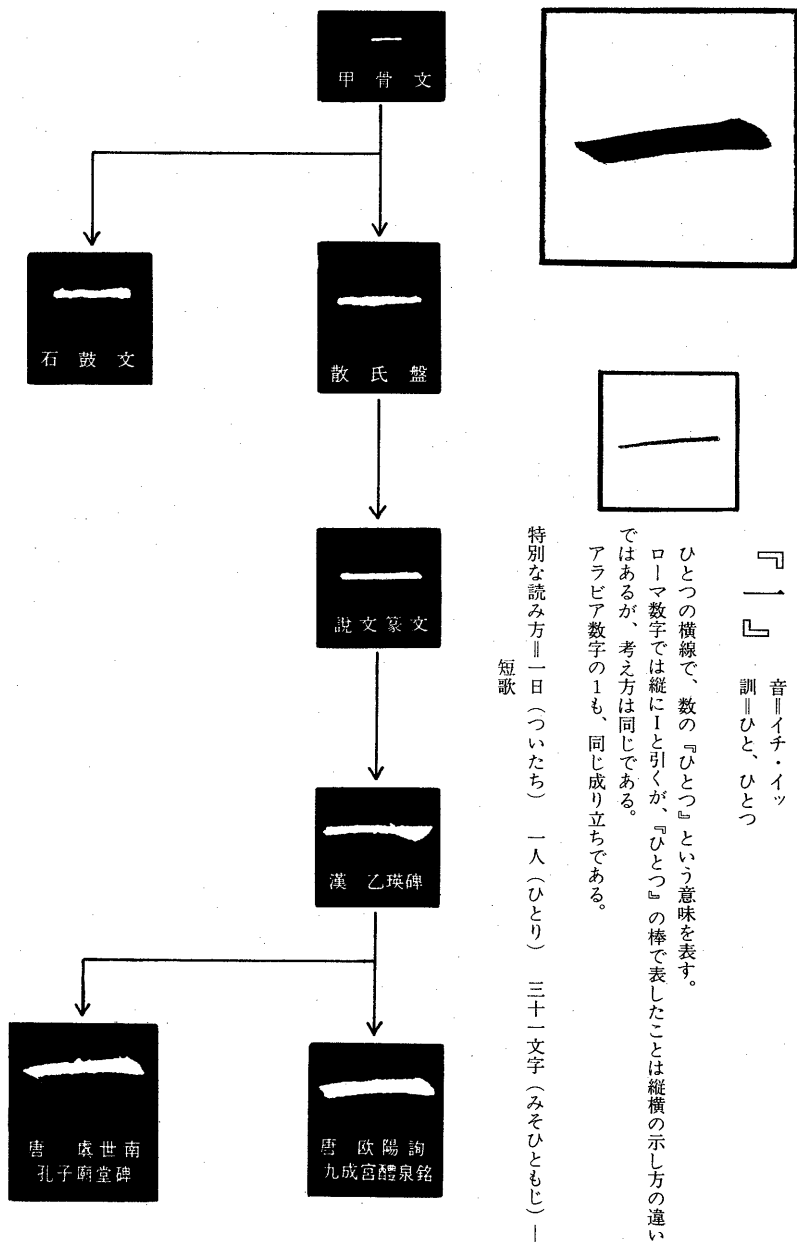
(平安朝) 平假名

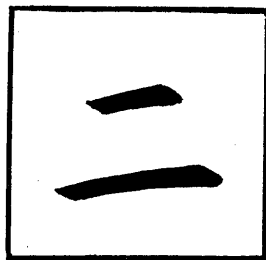
鹿 象形文字 ● 頭角足などの形を象っている。
 女 象形文字 ● 婦人が膝を屈し手を組んでいる形を表わしている。
 至 指示文字 ● 鳥が高處から飛び下りて地に來る意を指示している。
 步 會意文字 ● 止は足の形兩足を書いて歩む意を表わしている。
 年 形聲文字 ● もと禾と干の合字、禾は一年に一度みえる五穀を表わし干は音符である。

漢字楷書の学習法として、学習の基準になる文字を第一に挙げなければならない。その基準にする文字をどのようにするかが、重要な問題となってくるのである。この基準文字として、現代の日本における最高の理想的標準文字をベースにすることが、学習者にとつては、生涯の岐路ともなりかねない。そのために、いろいろの研究の結果、中国の初唐時代の欧陽詢（おうようじゅん）「中でも九成宮醴泉銘（きゅうせいきゅううれいせんめい）」を中心として「および虞世南（ぐせいなん）「孔子廟堂碑（こうしびやうどうのひ）」を中心として」の筆跡を主として、それに近いものを与えることがよいのではないかという結論に到達した。

各文字についての発達変遷の過程をたどりながら、最終的には、未熟ではあるが、自分の理想とする方向に努力して小字の「毛筆」と、硬筆代表として「鉛筆」に依る文字を併記しておいた。

※ 文字の古典資料については紙面の関係で原寸の八十四パーセントとなったことをこわっておく。





『二』 音ニ
訓 二ふた、ふたつ

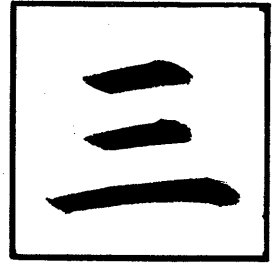
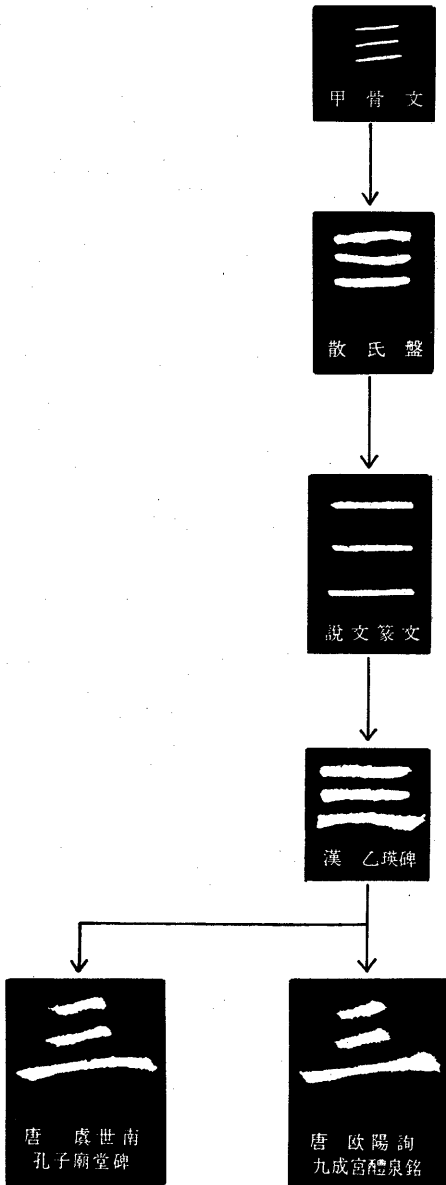
ふたつの横線で『ふたつ』という意味を表す。

ローマ数字ではIIと書く。

アラビア数字の『2』は、ふたつの横線の『二』をつないで『Z』となったように考えたものもあるが縦書の思想と横書思想とが混同しているさらいはある。

特別な読み方 二日（ふつか） 二十日（はつか） 二人（ふたり） 二十（はたち）

二十歳（はたち） 十重二十重（とえはたえ）

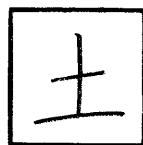
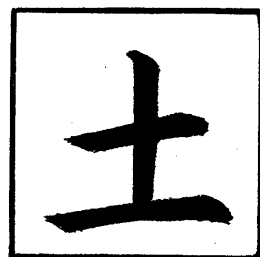


『三』

音||サン
訓||み、みつ、みつつ

『みつつ』の横線で、『みつつ』という意味を表した字である。
ローマ数字のIIIも同じである。
アラビア数字については六ページを参考にされたい。

特別な読み方||三味線(しゃみせん) 三十一文字(みそじひともし)―短歌



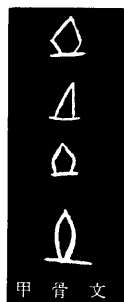
『土』

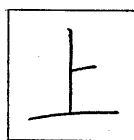
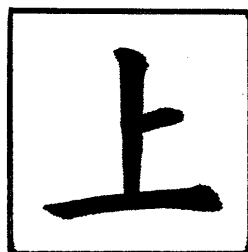
音ト・ド
訓ツチ

『つち』の中から草が芽を出した姿を表したもので、「つち」のことを表した象形字である。

人はこの『つち』の上に住んでいるので、『人の住んでいる所「土地」「郷土」や『国土』などの意味に使われている。

特別な読み方Ⅱ土産（みやげ）





『上』

音||ジョウ・シヨウ

訓||うえ・うわ・かみ・あがる、あげる・のぼる、のぼす、のぼせる

基準(もと)になる線から「上」の方に印を示し、「こちらの方です」と言う意味で、「上」の印を付けたもので『うえ』と言う意味を表した字である。

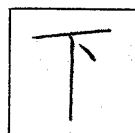
「土」という字と形がよく似ているが、区別するためには「上」という姿で書かなければならない。

「上」ということは「高い」ということもあるから、『のぼる』、『あがる』という意味にもなった。

また、「上昇」「上達」のように『のぼす』『のぼせる』『あがる』という意味にも使われたり、「上役」「上様」「上手」のように『身分が高い』『すぐれている』という意味にも使われる。

特別な読み方||上手(じょうず) 上手(かみて) —芸能舞台用語





『下』 音カ・ゲ

訓『した・しも・もと・さげる・さがる・おりる・おろす・くだす・くだる・くさる』

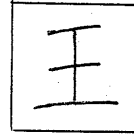
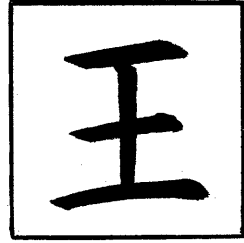
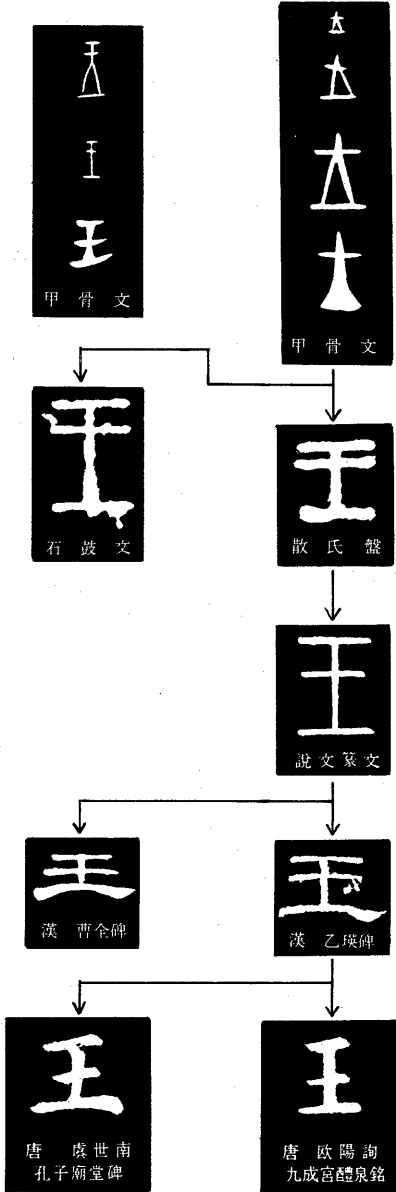
基準（もと）になる線から『下』の方に印を示し、『こちらの方です』と言う意味で『下』の印をつけた字で『した』という意味を表したものである。

『した』ということは『ひくい』ということでもあるので、『おりる』『くだる』『さがる』という意味もある。

また、『おろす』『くだす』『さげる』という意味にも使われる。さらに、『おとつてゐる』『下劣（ゲレツ）』という意味の言葉として使われる。

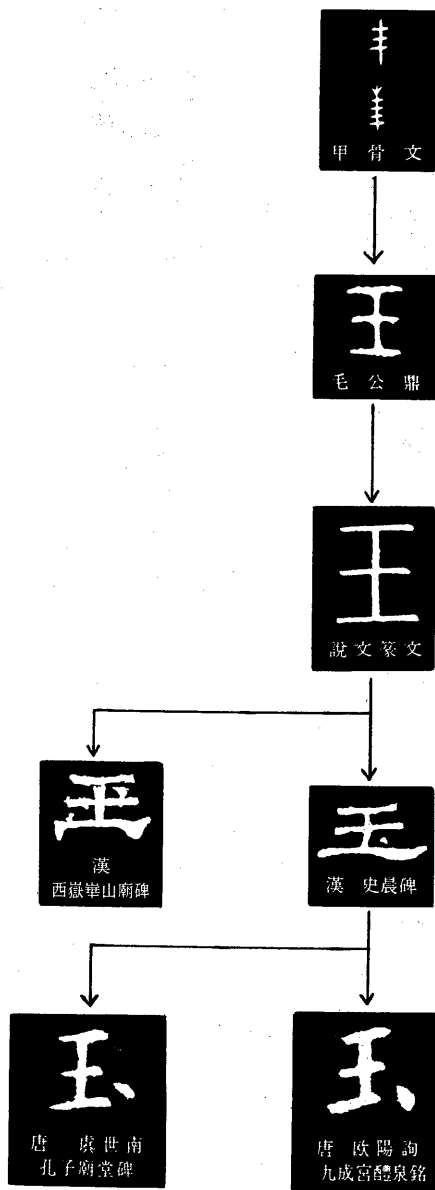
特別な読み方『下手（へた） 下手（しもて）』—芸能舞台用語





『王』
訓 音『オウ』

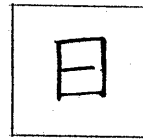
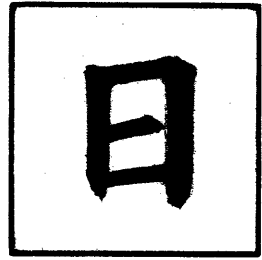
「天」と「地」との間に生きて生活している人々の中で、両手両足を広げて立っている偉大な人である『王様（オウさま）』を表した象形字である。
 「国で一番偉い人」「国を治める人」のことであるが、『そのみちで、一番すぐれた人』のこの意味にも使う。例えば、『陸の王者』と言え、『陸上競技場で一番すぐれている者』という意味であるし、『発明王』と言え『発明にかけては並ぶ者の無い人』ということになる。



『玉』

音—ギョク
訓—たま

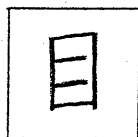
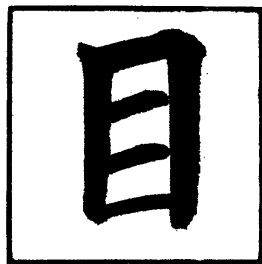
たぐさんの意味を表す「二」の『玉』を紐で通した形の象形字である。『固くて美しい石』『宝石』を表した字で、『玉(ギョク)』と言ったが、多くは磨いて「丸い玉」に作るのので、『たま』という言い方をするようになった。このことから、『丸い物』の意味に使われる。
また、金料玉案(キンカギョクジョウ)のように、『美しく立派なもの』の意味に使われる。
ある。古い字形は『王』であったが、『王(オウ)さま』の『王』と区別がつかないので、『たま』の印の「」をつけて「玉」とした。
しかし、『へん』の時は『王』で「」を付けない。読む時は、『王(オウ)へん』と言わないで、『玉(たま)へん』と言う。[理・現・班・桂・琳・玩・環・珈・琉球・瑠璃……]



『日』 音ニチ・ジツ
訓ニひ・か

太陽の形を表した象形字で、『お日さま』の意味を表したものである。中の「・」は、丸がただの『わっか』ではなくて、「お日さま」であることを表した印である。昔は「とき」は、お日さまの動きで測った。それで「とき」は「時」という字である。日の出から次の日の出までの「時の長さ」を『一日』と言う。この『日』に、今では「日曜」から「土曜」まで七つの名前が付けられている。また、『昼間』の意味に使うこともある。

特別な読み方ニ明日(あす) 昨日(きのう) 今日(きょう) 一日(いついち)
二日(ふつか) 二十日(はつか)



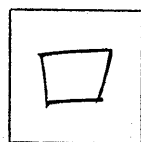
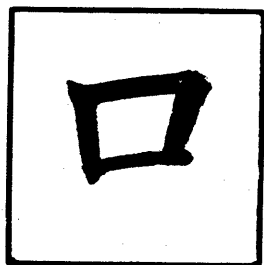
『目』
音モク・ボク
訓め・ま

目の形をかたどった象形字であるが、もともと『目』は、それを縦にしたものである。『目（め）』という意味を表す。『目』は物を見る器官だから、『見る』という意味や『物を見通す力』という意味にも使われる。例えば『目が利く』という言い方がこれである。

また、『網の目』『棋盤の目』『筋目』『木目』などの使い方もある。『目』は人にとって最も大切なところだから、『物事の一番大切なところ』の意味に使われる。『眼目（ガンモク）』さらに、『目指す』『目当（めあて）』など、『こころ』の意味にも使われることがある。



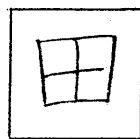
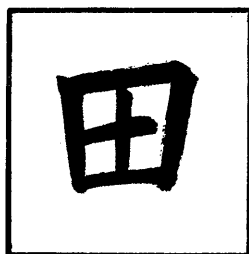
金文代用



音『コウ・ク』
訓『くち』

人の『口』の形を表した象形字で、『くち』という意味の字である。また、『口から出る『言葉』』という意味にも使う。『ひとかず(人数)』のことを『人の口』と書いて、『人口』と言うが、それは、『ひとかず』のことを『くちかず』とも言ったからである。また、『いりくち(入り口)』という意味にも使われる。口が『食物の『入り口』』だからである。

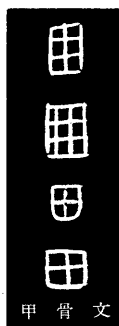
このように、『口』は『物事の初め』という意味にも使われる。



『田』
訓 田
音 デン

きちんと四角に区画された『たんぼ』の形をかたどった象形字で、作物を栽培し収穫するための『田』や『畑』を表した字である。日本では、『稲（米）』を作るところ』の意味の『水田』を表すのに使う。
また、『産物のとれるところ（作物以外の物）がとれるところ』でも、『塩田』『炭田』『油田』などのように『田』と言う。変遷（ヘンセン）のひどい例えに『桑田変じて海となる』と言うような使い方をすることもある。

日本では、『稲以外の作物を作るところ』は『畑』と言うが、中国には、『畑』という字はなくて、『作物を作るところ』はすべて『田（デン）』と言った。
特別な読み方『田舎（いなか）』



甲 骨 文



散 氏 盤



説 文 篆 文



漢 孔 宙 碑



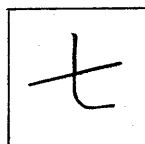
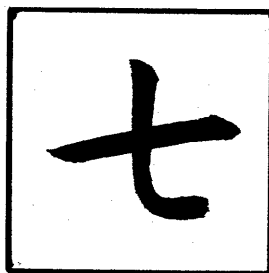
漢 熹 平 石 經



唐 褚 遂 良
雁 塔 聖 教 序



唐 歐 陽 詢
九 成 宮 醴 泉 銘

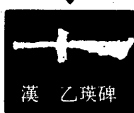
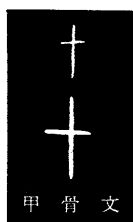


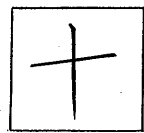
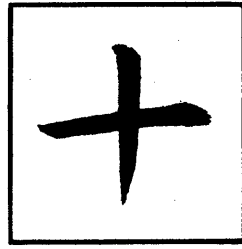
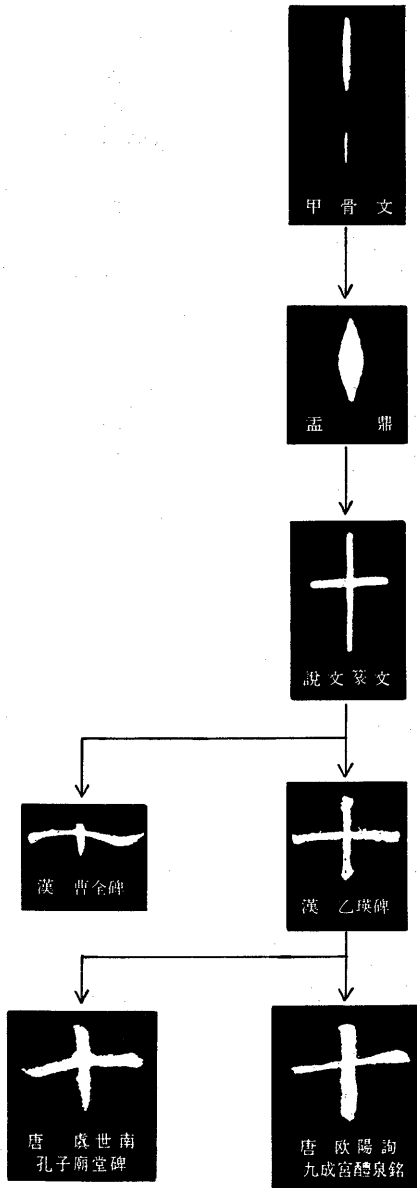
『七』

音||シチ
訓||なな、ななつ、なの

針の先が『切断した(折れる)』という形の字で、『切る(きる)』の元の字である。
『針(十)(ジュウ)』の三分(ブ)が欠けて、七分ほど残った形で、『ななつ』の意
味を表す。

特別な読み方||七夕(たなばた)





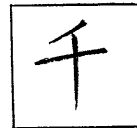
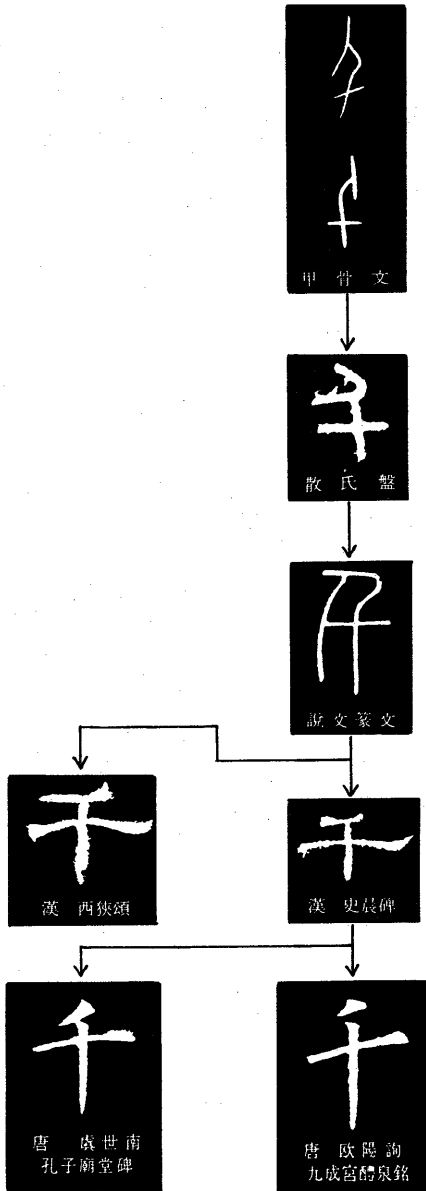
『十』 音『ジウ、ジツ』
訓『とお、と』

もとは、糸を通した針の形を表したもので、「針」という意味の字である。数を表す字は、「一」「二」「三」などのうちは簡単に作れるが、数が大きくなるとなかなかうまく作れない。

『ジウ』もそうである。こういう時には、たいてい同じ「音（オン）」の言葉を借りて作る。これを『仮に借りる』という意味で「仮借（カシヤク）」と言う。漢字の造字法で「六書」という中に、造字法の一つに「仮借」とあるが、これだけは「カシヤ」と読む。

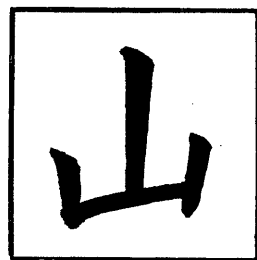
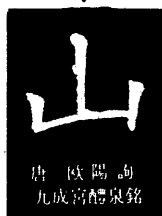
「はり」と「ジウ」は、中国では同じ音であった。それで「十」を「ジウ」の意味に使うようになった。ところが、「十」が「針」という意味と、数の「ジウ」という意味に使われたので、大まきとわしくなつたので、「はり」を表す字には「金へん」を加えて「針」とするようになった。

特別な読み方『二十日（はつか） 二十（はたち） 二十歳（はたち） 十重二十重（とえはたえ） 十八番（おはこ）』歌舞伎用語 三十一文字（みそひともじ）』短歌



『千』 音一セン
訓一ち

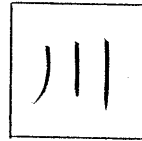
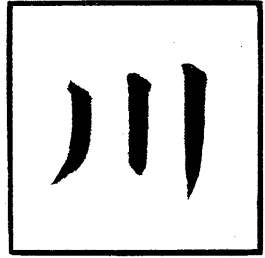
昔は人の形を書いて、それで『百の十倍のかず』を表した。
『千』は、人の形（イ）に『一』を加えて「一せん（せんが「こ」）という意味で作られた字である。だから、『二せん』は『手』と書き、『三せん』は『手』と、一字でこれを表した。今は、『二千』『三千』と書く。
多い数の単位なので、『非常に数がおおい』ことを表すのに使う。
日本では「千草（ちぐさ）」などのように、『ち』という言葉で、これを表した。



音 ㄣ
訓 山

特別な読み方 ㄣ 山車 (だし)

『やま』の形をかたどり、山の意味を表した象形字である。また、『やま』のように『高く積み重なっているもの』の意味にも使われる。
『サン』は漢音で、呉音は『セン』である。呉音は、「大山(ダイセン)」や「須弥山(シュミセン)」などのように固有名詞にわずかに使われているだけである。

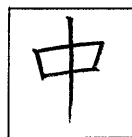
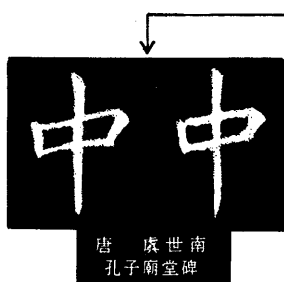
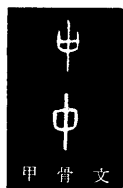
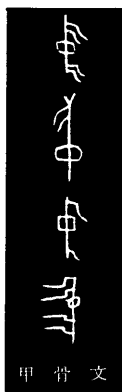


『川』

音『セン』
訓『かわ』

特別な読み方『川原』（かわら）

『かわ』の水が流れている様子を三本の線で表した象形字で、『川』という意味の字である。
『かわ』を表した字に『河』という字があるが、『川』よりも『大きいかわ』『長いかわ』に使うのが普通である。日本のように土地の狭い国には『川』だけしかない。『信濃川・利根川・熊野川・石狩川』。中国のような大陸に『河』が存在する。『黄河・遼河・長江・揚子江・西江』。それで、大きい河、小さい川、いろいろな『かわ』を合わせて、『河川（カセン）』と言う。
『かわ』の音の『セン』は、『地を穿（うが）って（突き抜いて）流れる』という意味の『穿（セン）』からきている。

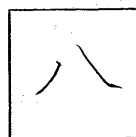
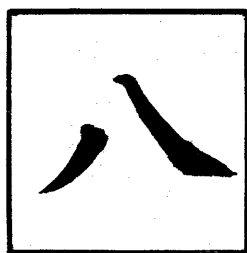


『中』

音 〓 チュウ
訓 〓 なか

物の真ん中に線を引いて「ここが『まんなか』ですよ」ということで、『真ん中』という意味を表した字である。『中』ということから、『中程（なかほど）』『途中』『ある範囲内』という意味にも使われている。

また、字の形が「真ん中を線が貫いた形」をしていて、矢が真ん中に当たったように見えるので、「命中」「中毒」のように『あたる』という意味にも用いられている。

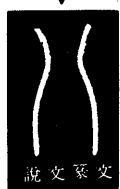


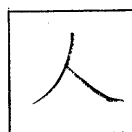
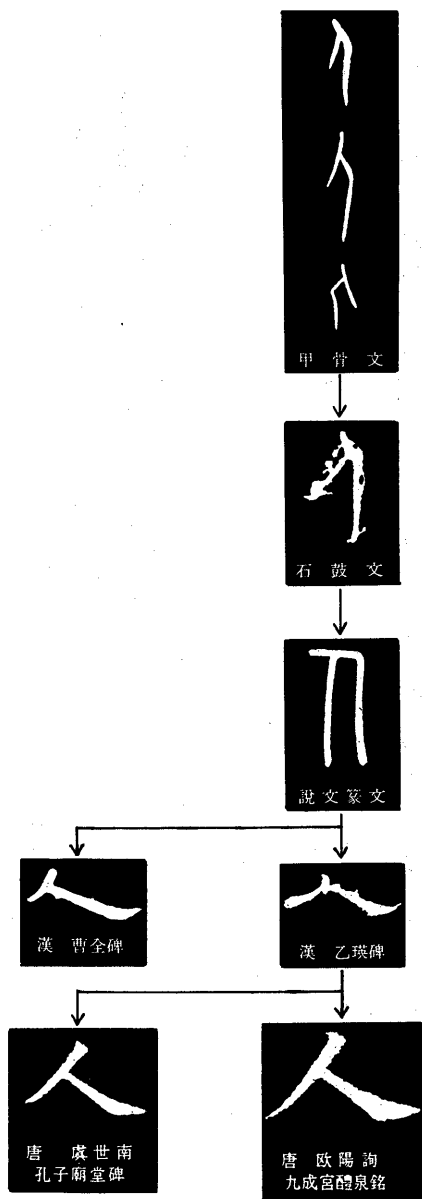
『八』

音ハチ
訓ヤ、やつ、やつつ・よさう

一本の棒を二つに分けた形（二つのものが二つに分かれた形）を表した字で、『分ける』という意味の字である。
『八』は二つに分けると「四」、さらに分けると「二」、さらに分けると「一」となるように、十までの数の中で、最も多く二つに分けられる数である。それで、分ける印の『八』で『ハチ』を表したのである。
また、『多い』という意味にも使われる。

特別な読み方：八百屋（やおや） 八百長（やおちよう） 十八番（おはこ）—歌舞
使用語





『人』

音||ジン・ニン
訓||ひと

人の立っている形を表した象形字で、『ひと』という意味の字である。
また、人を数えるときに「五人、六人、七人・・・」と言うように使われる。

特別な読み方||大人（おとな） 一人（ひとり） 二人（ふたり） 素人（しろうと）
玄人（くろうと） 仲人（なこうど） 若人（わこうど）

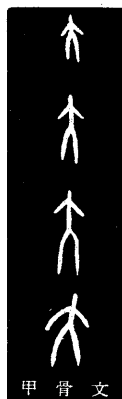


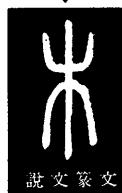
『大』

音 ㄉㄞ、タイ
訓 ㄛㄛ、ㄛㄛㄎㄞ、ㄛㄛㄞに

人が両手両足を広げた形を表した字で、『おおきい』ことを表現した字である。こういう構成の字は象形的であるが、意味が人ではなくて大きい『こと』を表すので、象形字とは言わずに指事の文字と言う。
『おおきい』という意味から、『多い』『豊か』『力が強い』『大切』『立派』などの意味にも使われている。
また、『態度が大きい』―『いばる』という意味や、『大勢（タイセイ）』のように『全体的』という意味にも使われる。

また、『大勢（おおぜい）』とも読み、人数の多いことに使われる。
特別な読み方 ㄛㄛ人（おとな） 大和絵（やまとえ） 大和魂（やまとだまし）



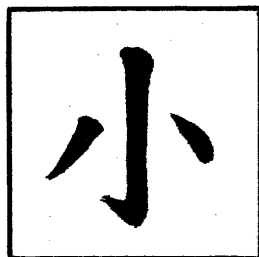


『木』

音——ボク・モク
訓——き・こ

木の形をかたどった象形字で、『木』という意味を表した字である。枝の部分よりも、目に見えない根元の方が大きく表されているところに、深い意味が感じられる。
「木刀」などのように、「木で作られた物」も『木』と言う。
『ボク』は漢音で、『モク』は呉音（古い音）である。
『木』の訓は、『き』だが、熟語になると「木の葉」や「木陰」「木立」のように『』と変わるのが普通である。

特別な読み方——木綿（もめん）



『小』

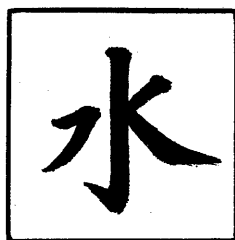
音||シヨウ
訓||ちいさい、こ、お

古い字の形は、小さな点三つで表されているが、今の形から見れば、一つの物(一)を分ける(八)ことを表した字と見た方がわかり易いようである。「物を『ちいさくする』こと」を表したものである。

また、「小作(コサク)」「小心(シヨウシン)」「小人(シヨウジン)・(こびと)」のように「ちいさい」こと、「わずかなもの」「つまらないもの」や「おさない」という意味にも使う。

「小生(シヨウセイ)」のように、『自分をへりくだって言う』使い方もある。

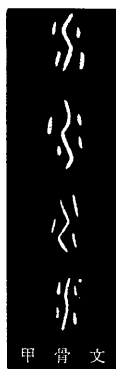
特別な読み方||小豆(あずき) 小雨(こさめ) 小夜時雨(さよしぐれ)



『水』
音 スイ
訓 ミズ

川の『みず』の流れる姿を表した象形字で、『みず』という意味を表した字である。海や川や池など『水のある所』を『水辺』『水郷』のように『みず』と言ったことがある。『水のようなもの』『液体』という意味で、『水銀』と言う使い方もする。また、『水星』と言って『星』の名前に使われたり、『水曜日』と言って『日』の名前に使われている。

『水曜』とは『水星』のことだから、『水曜日』とは『水星の日』という意味の言葉である。





『月』

音『ゲツ、ガツ』
訓『つき』

月の形をかたどった象形字で、『お月さま』の意味を表したものである。月はまん丸い形が毎晩欠けていき、すっかり黒くなると、今度は段々ふくらんでいき、またまん丸くなる。
この間が三十日かかるので、三十日を『一月（ひとつき）』と言う。昔の暦は、月の満ち欠けを基にして作ったので、月の形で日（ひ）ニチがわかった。満ちはじめが、『月たち』という意味で「一日（ついたち）」で、まん丸になるのが十五日、真っ黒になるのが三十日であった。『ガツ』は呉音で、『ゲツ』は漢音である。

特別な読み方『五月晴（さつきばれ） 五月雨（さみだれ）』



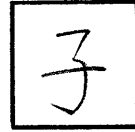
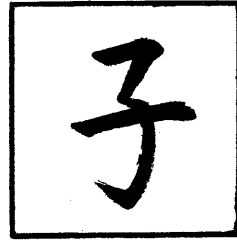


『力』

音||リキ、リヨク
訓||ちから

腕の形をかたどった字で、『腕の力』『腕力(ワンリヨク)』の意味を表した指事の文字である。昔は、腕力は大層必要な力であつたから、この字で『ちから』という意味を表したのでしよう。『体の力||体力』『知恵の力||知力』その他『氣力』『権力』などいろいろな力の意味に使つた。また、『力を尽くす||つとめる』ことという意味にも使われる。『リキ』は呉音で、『リヨク』は漢音である。『強力』は(キョウリヨク)と読むと『強い力』という意味であるが、(ゴウリキ)と読むと『強い力』という意味の外に『登山者の荷物を背負つて道案内する人』という意味になる。『剛力(ゴウリキ)』と同じ意味である。





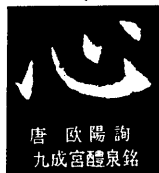
『子』 音シ、ス
訓こ

両足がおむつに包まれた子どもを表した象形字で、『あか子』『おさな子』という意味を表したものである。

また、『ちいさい』ものだから、『ちいさい』という意味にも使われる。「菓子」「椅子」「扇子」など物の名前の下に付けて、言い易く、聞いてもわかり易いように使うこともある。この場合『子』の意味はない。

「君子」などの同音の『師（先生）』の意味にも使われ、中国では、「孔子」「孟子」「朱子」など人柄や学問にすぐれた人を呼ぶのにこの字を使う。
また、男子（後には女子）花子・君子・和歌子……の美称として使われる。





『心』

音 シン
訓 シン

特別な読み方『心地(こころ)』

心臓の形をかたどった象形字で、『シンゾウ』という意味の字である。昔はただ『シン』と言った。人の心の動きは『心臓』が、つかさどっていると考えられていたので、『本心』などのように『心』がそのまま『こころ』という意味に使われるようになった。また、『中心』『心棒』などのように『真ん中』とか、『大切な所』という意味にも使われる。心臓は体の真ん中にあり、非常に大切な所だからである。

参考資料

書源〓藤原鶴来編 二玄社刊

書道大辞典〓伏見冲敬編 角川書店刊

日本語大辞典〓梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日

野原重明監 講談社刊

現代和独辞典〓ロベルト・シンチンゲル・山本明・南

原実編 三修社刊

現代独和辞典〓ロベルト・シンチンゲル・山本明・南

原実編 三修社刊

常用漢英熟語辞典〓講談社インターナショナル編 講

談社刊

掌中・書道年表〓船本芳雲編 不二出版刊

文字の書き方〓藤原宏・氷田光風編 講談社学術文庫

刊

字形と筆順〓氷田光風編 光村図書出版株式会社刊

漢字の成り立ち〓全日本書写書道教授連盟〓辻政弘編